

ラッキーガール夢を跳ぶ

弘前大学教育学部附属中学校 小笠原 琉 仁

夢を跳ぶとはどういうことだろう。ぼくはこの本の題名を不思議に思い、手にとってなんとなく読んでみました。

この本には、元女子陸上トライアスロンのパラリンピック選手である佐藤真海さんが、様々な困難を乗り越えながら、北京パラリンピック日本代表に選ばれるまでの道のりが書かれています。佐藤真海さんの実体験です。

真海さんは大学生のころ、骨肉腫という生死に関わる病気にかかってしまいます。そして、命のために右足の膝から下を切断しています。

この本を読んでぼくは、北京パラリンピックに出るという目標を達成したことよりも、つらいことがあっても笑顔、そして目標に向かってくじけずに、諦めず努力し続けることができたことがすごいなと思いました。ぼくだったら足がないということ、歩くこともできない、遊ぶこともできない、つまり、できることよりもできないことのほうが多いと思います。何もやる気が起きません。

真海さんは自分をラッキーガールと呼んでいます。なぜ、足がないというハンデを持っているし、困っていることやできないこともたくさんあるのに、自分をラッキーガールと呼んでいるのでしょうか。ぼくは、ラッキーかどうかはわからないけど、本の中のものっている真海さんの写真は、ほとんどが笑っている写真でした。なんで自分をラッキーだと思っているのだろう。それが不思議でした。本を読んでいくうちに、それがわかったような気がします。

それは、真海さんは障害をマイナスとして考えるのではなく、自分の個性、そして命の尊さや本当の幸せを学ぶことができた経験と捉えているからだと思います。そして、生きていくなどの当たり前で小さなことでも感謝しているからだと思います。真海さんのお母さんの言葉で「神様はその人に乗り越えられない試練は与えない」という言葉が、とても心に残っています。真海さんもこの言葉を思い出して、気持ちを前向きに切り替えることができたそうです。ぼくだったら試

練にあたつたとき、強い心を持つことができなくなり、試練に負けてしまうと思います。挫折してしまうと思います。真海さんは試練をただの苦しいものと考えたのではなく、必ず意味があり、その闇が晴れた時、想像以上の幸せや喜びが待っていると考えています。ぼくはこの考え方がすごいなと思いました。

もう一つの理由は、たくさんの素敵な人達に支えられていたということです。パラリンピック出場までに、素敵な言葉をかけて励ましてくれた母親、同じ病気仲間、義足を調整してくれている白井さんなどたくさんの人に出会い、支えられていました。自分一人ではなく、周りの支えがあつたからこそ、パラリンピックを目指すことができたのだと思います。

ぼくは以前母に

「あなたの長所はわからないけど、ものすごく人に恵まれている。」

と言われたことがあります。ぼくには足はあるけれど、実は心臓の重い病気を持っていて、昨年手術をしました。ちよつと走ったりするとすぐに息が上がりが、心臓に負担がかかつてしまいます。しかし、今まで学校に行きたくない、生きたくない、死にたいなどと思つたことは一度もありません。それ

は、家族や医師の先生、友達などのたくさんの支えがあつたからだと思います。自分一人ではできないことも、周りの人の支えがあればできるようになるということに改めて気づきました。そして、夢に着地するではなく、「夢を跳ぶ」なのは、夢をゴールと捉え、夢を叶えて終わりではなくその次にも常に希望を持ち、明るく前向きに考えていこうということなのだと思います。

この本を読む前のぼくは、困難なことやハンデはマイナスでしかないと思っていました。しかし、何かしら意味があり、乗り越えた先には大きな希望や明るい未来が待っているから前向きに考えよう、と思うようになりました。障害があるかないかは関係なく、人にはそれぞれ悩みがあると思います。その悩みをどう捉えるかというのは大事なことだと思います。ぼくは前向きに考えていく、それができなかったとしても、決してマイナスには考えないようにしたいなと思ひました。そして、自分一人ではできないけれど、周りの人のおかげでできることがたくさんあるんだということを忘れずに、小さな当たり前のことに感謝できるようになりたいです。そしてぼくも、夢を跳んでいきたいです。